

## 無力な私からの次回予告！？

第 12 期 北島 大輝

小野晃典研究会に入るまで、私は、慶應義塾大学の多くの学生が少なくとも思っているであろうとおり、自分は有能な人間であると思っていました。それなりに勉強は出来ていましたし、ダメ出しというものをあまりされてこなかった人生を送っていました。

このように、自分に対する自信のせい、入る研究会はエグイところと決めていました。自分であれば、どの環境下でもうまくやれるという確信に基づいた上での判断です。そういうわけで、小野晃典研究会が必然的に考慮集合に入り、小野晃典研究会の門を叩きました。

しかし、小野晃典研究会での 1 年目は、私の想像とは異なるものでした。エグイの度合いは想定していたとおりですが、どの環境下でもうまくやれるという確信が全くの過信であったというぐらいに、己の無力を痛感させられる日々でした。その最たる出来事として、初めて取り組んだケースの発表と三田祭論文での執筆活動が挙げられます。前者では、緊張のせい、手が震えてしまい、めちゃくちゃな日本語を話していました。発表に対するフィードバックは、資料に対するダメ出しや論理性の無さに対するダメ出しが主でした。そして、後者では、執筆した論文に対する先生からの赤字による指摘が物凄く、先生から「君は日本人なのか？」と言われるほどでした。執筆に際して、小野晃典先生をはじめ、大学院生および 11 期の先輩らには多大なる迷惑をかけてしまいました。

しかし、このような出来事があったからこそ、自身を変えなければならぬと奮闘し、成長を実感できるようになったのは間違いありません。その最たる出来事として、慶應義塾大学商学部 4 分野インゼミでの発表と卒業論文の執筆が挙げられます。前者では、動画で自身の発表を撮影したりするなどして練習をしました。その結果、本番では、緊張は少なからずしていたものの、原稿を見ずに整った日本語で発表できるようになりました。そして、後者では、主語と述語の一致、接続詞の使い方をはじめとする様々なことを考慮して、読み手を意識した文章を書こうと努めるようにしました。その結果、本文それ自体の執筆において特段困ったことはありませんでした。

最たる出来事をはじめとする小野晃典研究会での 2 年間は、私を大きく変化させてくれました。お分かりのとおり、その変化とは、冒頭で述べたような勘違い甚だしい人間から、己の無力を痛感するが故に成長に対して意欲的である人間への変化です。今やっと、社会に出る下地が整ったと確信しています。この春から、私は某総合電機メーカーへ入社しますが、そこでも、多くの無力をきつと痛感することでしょう。しかし、その都度、成長に対して意欲的でありたいと強く思っています。次回お会いする時（少なくとも来年の OB・OG 会までには！なお、配属される地域によっては、つるのやなどの居酒屋で開かれるゼミの飲み会に襲撃するつもりなので悪しからず！）には、小野晃典先生や大学院生、OB・OG をはじめとする先輩ら、同期である 12 期の皆、後輩である 13 期の皆に少しでも成長した姿を見せることを約束します。「う、ご期待！」ということで、卒業セッセイを締めさせていただきます。